

氏名(本籍)	ほし の もりもと ゆう こ 星野(森本)由子(茨城県)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博甲第4884号		
学位授与年月日	平成21年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	Factors Affecting Performance of Japanese EFL Learners in Multiple-Choice Vocabulary Tests in Sentential Context (文脈内多岐選択式語彙テストにおける日本人EFL学習者のパフォーマンスに及ぼす要因)		
主査	筑波大学准教授	博士(言語学)	卯城 祐司
副査	筑波大学教授		小野塚 裕 視
副査	筑波大学准教授		久保田 章
副査	筑波大学准教授		磐崎 弘 貞
副査	筑波大学准教授	Ed.D. (教育学)	平井 明 代
副査	麗澤大学大学院言語教育研究科教授		望月 正 道

論文の内容の要旨

本博士論文は、日本人英語学習者が文脈内多岐選択式語彙テストに解答する際のテストパフォーマンスに影響を及ぼす要因を調べることを目的とした。その際、テスト項目の特性に焦点を当て、文脈要因・錯乱肢要因・正答選択肢要因のうちどの要因が最も影響が大きいのかを比較した。この他、(a) 文脈内多岐選択式語彙テストにはどのような特徴があるのかを調べること(実験1)、(b) 文脈内多岐選択式語彙テストにおいて、引き付けやすい錯乱肢を調べること(実験3)(c) 多岐選択式語彙テストにおける、解答プロセスやストラテジーを調べること(実験2, 5)に焦点を当てて実験を行った。

第3章の実験1では3種類の文脈内多岐選択式語彙テストを用いて、それぞれどのような特徴を持つのかを検証することを目的とした。テスト形式(言い換え形式・空所補充形式)と文脈が手がかりになるかどうかを変えた3種類のテストについて、単語の意味のテスト、Word Associates Test、TOEICリーディングセクション(弁別力が高い19問)それぞれが文脈内多岐選択式語彙テストのパフォーマンスに及ぼす影響を、標準化偏回帰係数を用いて調べた。その結果、言い換え形式では単語の意味の知識やパラディグマティック関連の知識が、そして空所補充形式ではコロケーションの知識が文脈内多岐選択式語彙テストのパフォーマンスに影響を及ぼしていることが示された。更に、文脈が手がかりになるテストでは読解能力も有意な影響を及ぼしていた。以上から、同一の文脈を用いた文脈内多岐選択式語彙テストでも、テストの特徴によって関わっている知識が異なることが示された。また、3種類のテスト間で難易度を比較した結果、言い換え形式で且つ文脈が手がかりになる場合にそれ以外の場合よりも容易になっており、先行研究を支持する結果となった。

第4章では、文脈要因(実験2)、錯乱肢要因(実験3)、正答選択肢要因(実験4)に分けて、空所補充形式の文脈内多岐選択式語彙テストのパフォーマンスに及ぼす要因を抽出した。まず実験2では発話プロトコルを用いた実験の結果、テスト受験者が用いる文脈内の手がかりの種類は項目困難度によって変化しなかつ

たが、文脈内の未知語の有無や未知語と空欄との距離が、難易度に影響を与えているという傾向が見られた。つまり、難易度が高い問題では、文脈内に未知語が存在する傾向があるために、テスト受験者は文脈の手がかりを効果的に使用できず、その結果として正答にたどり着けない場合が多かった。以上から、文脈内の未知語の有無が難易度に影響を与えている可能性が示唆された。

次に実験3では、正答選択肢とパラディグマティック関連にある錯乱肢、文脈内の語とシンタグマティック関連にある錯乱肢、無関連の錯乱肢を準備し、錯乱肢の種類によって難易度が変化するかどうかを調べた。その結果、シンタグマティック関連の錯乱肢を含む問題は無関連の錯乱肢を含む問題よりも一貫して難しく、全ての熟達度群で有意差が見られた。一方、パラディグマティック関連の錯乱肢については結果が一貫していなかった。以上から、錯乱肢の種類は文脈内多肢選択式語彙テストの難易度に影響を与えることが示された。

実験4では、Perkins and Linnville と (1987) から抽出した5つの正答選択肢要因(頻度、文字数、音節数、同義語の数、抽象性)が文脈内多肢選択式語彙テストの難易度を有意に予測するかどうかを調べた。全部で10種類の文脈内多肢選択式語彙テストを用いて重回帰分析を行った結果、10のテストのうち8のテストで頻度が直接正答率に影響を及ぼし、また文字数、抽象性、同義語の数の要因も少なくとも1つのテストで直接正答率に影響を及ぼしていた。一方、音節数はいずれのテストでも直接的な影響を及ぼしていなかった。以上から、正答選択肢の頻度、文字数、同義語の数、抽象性が正答選択肢要因として選出された。

第5章では、第4章で扱った3つの要因を統合し、どの要因が最も文脈内多肢選択式語彙テストの難易度に影響を及ぼしているのかを、構造方程式モデリングを用いて調べた。この結果、文脈要因が正答選択肢要因よりも難易度に大きな影響を及ぼしていることが示されたが、この2つのパス係数の間に有意差は見られなかった(但し、モデル構築の際に錯乱肢要因と正答選択肢要因の中の抽象性要因が省かれた)。次に、上記のモデルで難易度に影響を及ぼしていた要因に焦点を当て、テストストラテジーの使用を比較した結果、正答選択肢の文字数以外の要因で、ストラテジー使用に差が現れた。特に、言語知識に基づく消去法ではストラテジーの使用頻度に差が出なかったものの、ランダムな推測に基づく消去法では有意な差が現れていた。

以上の結果を統合すると、文脈要因が正答選択肢要因よりも文脈内多肢選択式語彙テストのパフォーマンスに大きな影響を与えていることが示唆された。学習だけではなくテストにおいても語彙を文脈内で提示すべきであるという考えが主流になっているが、文脈内提示と単独提示テストでは異なる特徴を持つことが本研究から明らかになった。

審査の結果の要旨

本論文は、文脈内多肢選択式語彙テストを受験する際の日本人英語学習者のパフォーマンスに及ぼす要因を明らかにすることを目的としている。文脈内多肢選択式語彙テストは様々なテストで幅広く使用されている一方、実証研究はほとんど行われていなかった。そのため、語彙は文脈内で提示すべきである、という直感が先行しており、そのようなテストが実際に測定している能力や、テストの難易度に影響を及ぼす要因についてはほぼ未解明であった。本論文はこの点に着目し、テストパフォーマンスがどのような要因によって変化するのかについての解明を試みたものである。

本論文の優れた点は、大きく以下の3点にまとめられる。

第一に、従来の研究では別々に扱われている、文脈要因・錯乱肢要因・正答選択肢要因を総合的に扱った点である。筆者はそれぞれの要因について、複数の実験結果から有意になる要因を抽出した上で、第5章において構造方程式モデリングを用いて検証している。本論文では文脈要因が最も難易度に影響を及ぼす要因であるというモデルを示し、文脈内で測定する語彙テストが測定する能力は単独提示される語彙テストとは

異なることを明らかにしている。この点は、語彙テストとして文脈内多肢選択式テストを実施する目的や、その結果の解釈について、今後の研究に大きな示唆を与えるものである。

第二に、上記のような主要な研究結果に加えて、錯乱肢のひきつけやすさやテストの解答プロセスについても、複数の実証研究を通して詳細な検証が行われている点が評価できる。第4章に記述されている実験2では文脈要因、実験3では錯乱肢要因、そして実験4において正答選択肢要因を扱うなど、多角的な視点から文脈内多肢選択式語彙テストの特性を明らかにしている。

第三に、上記の実証研究が、量的・質的両面から行われている点である。量的な研究では文脈内多肢選択式語彙テストの特性を検証し、質的研究では学習者の特性により重点をおき、発話プロトコルを用いた研究を行っている。また、分散分析・重回帰分析・カイ二乗分析・共分散構造分析・項目応答理論を適切に使用している分析手法の確かさについても高く評価できる。

さらに、本研究の結果は、語彙知識・語彙テストに加え、本研究を特徴付ける語彙と文脈の関わりに関連する未知語の推測研究を含む幅広い文献研究を基に考察されており、本研究の結果を示唆に富むものとしている。

今後の課題としては次の3点が挙げられる。

第一に、テスト受験者の個人差についての検証が課題として挙げられる。本研究は主にテストの特性についての要因を取り上げているが、熟達度に応じてモデルが変わるかどうかを調べるなど、個人的な要因を加えていくことも可能であろう。今回は、テストの解答プロセスを扱うことでストラテジーの使用などの個人的な要因を扱っていると述べているが、より包括的に調べるのであればより多くの要因を取り入れて検証を続け、モデル化を図る必要がある。

第二に、質的実証研究から得られたデータをさらに深く考察する必要があると考えられる。特に、量的分析と質的分析をより関連付け、総合的に考察することによって、本研究の学術的な位置づけを高めることができると考えられる。

第三に、文脈要因の分類に残る課題が挙げられる。文脈の難易度が文脈内多肢選択式語彙テストの結果に影響を及ぼすことが本研究結果から結論付けられたが、今回扱った文脈の難易度は、文脈内にある未知語や未知の表現の有無、そして未知語と空所との距離に限られている。文脈内で使用されている語句だけではなく、文脈全体としての内容のわかりやすさについても難易度に影響を及ぼす可能性があると考えられるため、文脈要因をより精緻に分類し、更なる研究を行うことが必要である。

こうした一定の課題はあるものの、本論文は綿密な実証手続きを経た研究であり、これまでのテスト研究や語彙研究を更に発展させる結果を提示するものであることから、高く評価できる。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。